



すぎさん

<http://www.suginami->

令和3年 9月号

杉並区立杉並第三小学校
〒166-0003 杉並区高円寺南1-15-13
TEL 03-3314-1564
FAX 03-3314-1449

大人ができること

副校長 板垣 聡美

開催1年延期、無観客開催等、異例づくめの中で東京2020オリンピックが行われました。この夏休み、ご家庭でもテレビ画面に向かって各競技における選手の活躍に、熱い声援を送ったことと思います。また、この時を迎えるまでに選手の皆さん、支える関係者の方々の歩みにストーリーがあって、その一つ一つにも心を動かされました。

体操競技の内村航平選手は2008年の北京オリンピック出場から全種目に出場し、今度のオリンピックで4度目の出場でした。男子の種目は、ゆか・あん馬・つり輪・跳馬・平行棒・鉄棒の6種目があります。最初に予選が行われ、予選を通過した選手で団体総合、個人総合、種目別で決勝が行われます。今回、内村選手は怪我の影響もあり、全種目出場を断念し、種目別の鉄棒一つに絞って参加しました。数々の輝かしい記録を作り体操界のレジェンドと言われる内村選手の活躍は日本のみならず、世界中の注目を集めていました。体操日程の一日目、種目別の予選の演技に入った内村選手は、H難度と言われる世界で何人かしかできない難しい技をいくつも成功させ、見る人を惹きつけていました。しかし、次の技へ移る途中で鉄棒から手が離れてしまい、体ごと落下してしまいました。誰も予測できなかった事態に緊張が走りましたが、体制を立て直し、演技を最後までやり切りました。結果は、落下したことで減点となり予選を通過することができませんでした。その後、チームのキャプテンとして同会場でチームメイトの演技を見守り、声をかける姿が見られました。何年もかけてこの日を目指して苦しい練習に耐え準備してきた内村選手は、今、どのような思いでいるのだろうと、胸が苦しくなりました。

このように内村選手の様な大舞台ではなくとも、人が生きていく時々に、何度となくこのような経験は様々な場面で起こっていると思いました。例えば、何度も繰り返し練習したのに漢字テスト当日にうっかり間違えてしまい合格の点数に届かなかったり、合唱のピアノ伴奏を本番で間違えて頭が真っ白になったり、クラスみんなの前で漢字を読み間違えてしまったり、自分のパスミスが相手チームのシュートにつながり逆転されて試合に負けしてしまったり…。そのたびに、悔しかったり恥ずかしかったり、逃げ出したくなったり、何と

も言えない思いで心がえぐられたりします。このたとえ話は何を隠そう、私の体験のほんの一部です。その時は、顔から火が出るほど恥ずかしい思いも、悔しくて涙を流したりもしました。でも、次は同じことにならないようにやり方を工夫すること、苦手なところに気を付けること、自分で納得するまで練習すること、最後まで気を抜かないこと等、そのいくつもの積みかさねが自分の成長につながったと感じています。振り返ってみると、スムーズに乗り越えられた場面よりも、つまずき失敗し苦しい思いをした経験の方が、より大切なことに気付かされ、自分の事だけでなく周囲の人達の事も考えることができ、感謝の思いを持てるようになったと思います。

今回の大会で野球競技の監督をされた稲葉篤紀監督は、北京オリンピックに選手として出場し4位に終わりました。メダルを逃した悔しい気持ちを忘れないようにユニホームを家の玄関に飾り毎日見続けていたそうです。また、手帳の一番始めのページには野球のジャッキーロビンソン選手の言葉「不可能の反対は可能ではない、挑戦だ」と書き、常にその言葉を目にすることで、挑戦する気持ちを奮い立たせてきたそうです。

私たち大人は、この東京2020オリンピック、今行われているパラリンピックの選手が競技する姿を通して、次の時代を担う子ども達に何を伝えればいいのか。先を予測することが困難な時代にどう生きるべきか。子ども達は自分の世界が広がりがかわる人が増えれば、そのたびごとに新たな壁にぶつかります。大人は、子どもの失敗や困難を取り除くのではなく、学校・家庭・地域それぞれの立場で寄り添い関わりながら、自分で判断し乗り越えていく力をつけてあげたいと思います。

内村選手が8月末のある番組でお話されていました。「今回のオリンピックの予選敗退をやっと受け止められるようになった。東京オリンピックに向けて、H難度の大技の練習は繰り返しやり心配は無かったが、当たり前前にできると思っている技の練習はおろそかになっていた。そこも含めて、しっかりやるべきだった。」そして、こう続けました。「努力が報われないはずが無いことを、次の世界選手権で証明したい。」とても力強い言葉でした。